

自分の領域で活動し、その成果がもたらすものを考える

岩槻邦男（兵庫県立人と自然の博物館 館長）

ひとはくの共生のひろばは2012年が7回目になります。今回も例年の通り、2月11日に実施されました。毎年順調な成長を続け、少しずつ新しい表情も加わり、今年も充実した1日を過ごすことになりました。今年は参加者が少し減ったようですし、発表の内容もある程度の落ち着きを見せていましたが、それは共生のひろばがそれだけ安定したイベントになっていることを意味してもおります。



7回目には里山林に関する発表が目立ちました。全部で15題だった口頭発表のうち、7題までが、里山林に関するものでした。しかも、いずれも都市近郊の里山林の管理維持に関する話題でした。もちろん、詳細に見ればそれぞれに異なった地域で、異なった手法を用いた活動に関する報告でしたが、いずれにしても広義には里山林に関する活動でした。すでにお互いに情報交流のある例もありましたが、共通の課題に対して、このような機会に協働の可能性をさらに深めるのは意味のあることです。兵庫県での活動を、広く全国に、世界に発信するのも大切なことです。

都市近郊の里山保全林への対応は、全国的にも、多様なボランティア活動の振興と、公共機関からの補助の制度の拡大などが共調して、最近は見える成果をあげており、各地で今日風に整備された里山林を見ることができます。兵庫県はそれを先導的に推進している地域でもありますので、たまたま今年この関係の話題が目立ったというのではなく、徐々に熟成しつつある活動が、それなりに花開き、実を結び始めているということなのでしょう。

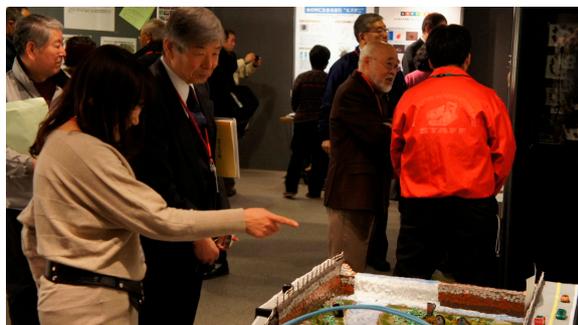
しかし、里山放置林にかかわる問題としては、都市近郊で遭遇する問題よりも、中山間地帯における現実がより大きな課題となって日本列島にのしかかってきています。兵庫県にも、荒廃の進んだ里山林が、野生動物の跋扈もあって、難しい問題を展開しています。昔は野生動物を山に閉じ込めていた人々が、今や自分たちの耕作地どころか住いまでを網で覆って野生動物の蹂躞から護る必要がふつうの光景になってきたようです。このような状態に対して、望ましい対応が試行され、それなりの成果をまとめて共生のひろばで語られるようになれば日本列島の明日はより明るくなるだろうな、とも考えていました。

里山は日本人の自然観を正直に反映した景観です。里山の荒廃は、日本人のこころの荒廃に通じるところがあります。2010年の生物多様性条約加盟国会議（COP10）の際に日本政府が世界に向けて発信したサトヤマニシアティブは、諸外国に対して里地里山のような二次的自然を大切に守って行こうと呼びかけるものですが、これは日本国内に向けて発信されるべき重要な課題でもあります。わたしたちも自分たちの周辺に見られる里山の景観を通じて日本人であることを再確認し、日本列島の豊かな自然のうちに生かされていることに感謝の念を育てたいものです。

今年は、キッズの出演はありましたが、キッズが主役になる発表はありませんでした。ひとはくでは、この年度から、キッズ向けのプログラムを大きく発展させ、県内の各地へキッズのためのキャラ

バンを組むなど、多様な活動を通じてキッズやその保護者たちとの協働の活性化を図っています。さらに、東日本大震災の災害の記憶が冷めがたい東北地域へ、はじめは仙台へ、後に八戸、久慈などへと、自分たちで培ったノウハウを生かし、キャラバンを送って被災地域の人たちとの絆を確かめたりしております。そこから育ってくる成果も、やがて共生のひろばに乗るのではないかと期待するところ です。

キッズより少し年齢層が上がって、高校生の活動が目立っており、その活動の独自性、発表する人たちの脳の軟らかさなどが、ひととき参加者の関心を集めたようでした。学校の団体も、学校を外れた仲間の活動も、たしかにグループを上手に動かす「手配師」を必要とはしますが、発表したグループのそれぞれで、活動主体が高校生自身であるのが好ましく写りました。若い世代が積極的に博物館の活動に参画するのを見ますと、ひとはくの活動にさらに一段と高度な成果が稔っていることが確かめられ、嬉しくなってもきます。



だからといって、主流であり続け、貢献の大きいシルバーの発表、参画を軽視するというものではありません。高校生がシルバーになっても共生のひろばで活躍する光景を夢に描いてみます。定年で仕事を卒業してもまだまだ活動能力の高い現代人が、活躍できる分野で自主的に大きな貢献を果たし続けることは、地球の持続的利用のために不可欠なエネルギーとなっています。これなしに地球の持続性が維持できないというのは、共生のひろばにもそのまま当てはまる事実なのでしょう。

発表にかかわる積極的な活動は、ポスターセッションでも顕著でした。コピー機が進歩し、それを上手に扱う人が増えてきたせいもあって、ポスターの制作にもいろいろの知恵が垣間見えました。ただし、表現の巧みさだけが人々を惹き付けたのではなく、実際には内容のしっかりしたものが参加者の注意を惹いていたようで、その健全さを安心してみせていただきました。もちろん、単に成果を説明するだけでなく、説明という行動をより高い技量で磨こうとしたり、実物の表現を多面的に演出しようとした作品が少なくなかったことが、今回の発表を際立たせた特徴だったように見せてもらいました。実物展示は博物館の活動の中核にあります。博物館の展示室の利用が単に収蔵物を展示して教育機関に徹するというのではなく、創意工夫をもって現在地球上で動かされている事実を表現し、そこから見えてくるものを体験しながら、よりよい地球の構築に携わる喜びが見出されたら、と思います。2月11日の共生のひろばの企画展示室での雰囲気の上り上がりはそのような気配を漂わせておりました。

環境に関する活動は、act locally, think globally をモットーとします。この言葉は日本語に訳すと、地域で活動し、地球規模で考えよう、となります。ただし、local - global の対応は、単に対象の地域を表現するだけでなく、活動の領域についても象徴的に当てはめることがあります。アライグマの駆除に励んでいる人は、アライグマという危険な外来種について犯される危険の除去という具体的な活動をしています。外来種にはブラックバスもありますし、セイタカアワダチソウもあります。外来種への対応は、個別の種についての具体的な活動を必要とする課題ですが、特定の1種が片付いたらそれで外来種問題が片付くとはいえません。さらに、外来種の問題が片付いたらすべてめでたしというのではなくて、生物多様性保全のためには、絶滅危惧種の問題も、里山放置林の荒廃の問題もあります。個々の、ローカルな領域の課題を処理しながら、その課題は自然環境保全というグローバ

ルな視点から見ればどの部分の改善に相当するのかを常に意識することが不可欠です。その意味でも、今年の表題に設定したように、act locally, think globally には、自分の領域で活動し、その成果の自然環境に及ぼす意義を考える、という解釈もあっていいはずです。

このような視点を踏まえて、今年も特定地域における具体的な活動の優れた成果の発表を聞かせていただきました。それが、個々の課題対応で優れた成果を示しているだけでなく、さらに共生のひろばで語り合われることで、他の地域、他の領域での活動とどのように総合し合うものか、じっくり考える1日を過ごすことができます。参加したすべての人が、地球環境における共生の意義を、多様な発表を重ね合わせて考える貴重な時を共有するひろばに立つことができるということです。

発表すべき課題を引っさげて参加した人も、多様な発表を聞きながら、think globally に徹した人も、今年は発表しなかったけれども来年は挑戦しようという人も、多様な人が集って前向きに生きる共生のひろばが、今年も熱気溢れる空間を醸し出していたことを、わたしもそこに参加した1人として、とても充実した気持ちで体験していました。

共生のひろばも、次回の第8回目は、ひとはく20周年の事業の一環で実施されるはずです。いつその盛り上がりが見られるように、仲間のグループにも呼びかけ、ひろばが一杯の人で埋め尽くされるように、皆様のご協力を期待します。

